



活発化する欧州域内展・テーマティック展

—マルチラテラーレ 2017 を見学して—

大沼幸雄

8月23日～9月1日まで10日間ほど家内と共に、オランダへ出かけました。目的は、オランダで開かれるドイツの音楽切手グループ総会へ出席するためでした。

総会は、地方の中小都市スヘルトンボッシュで開かれ、同都市では同じタイミングで「マルチラテラーレ 2017」と称する7か国共催（ドイツ、リヒテンシュタイン、ルクセンブルク、オランダ、オーストリア、スロベニア、スイス）の欧州域内の国際切手展が開かれており、これをつぶさに見学する機会に恵まれました。

切手展の概要は下記の通りです。

総フレーム数：1000 フレーム(ニューヨーク世界展の4分の1)

クラス：伝統、郵便史、テーマティック含む全クラス

主要テーマ：「欧州の建築と寺院」

グレード：ランク 1

欧州では、ランク 1：国際展、ランク 2：全国展、ランク 3 地域展と三段階に分かれており、それぞれ同じ「金賞」でも点数がランク毎に異なる仕組みが確立しています。オランダでの国際展は 2005 年以来 12 年ぶりとのことで、オランダ郵政も力を入れている印象でした。

テーマでは、マルチ・フレームの作品が 22 作品あり。大金賞 2、金賞 4、大金銀賞 5、金銀賞 8、大銀賞 3 との結果でした。大金賞は、「カーレース・トラック」「オランダの 4 人の女王の事績」金賞は、「作曲家カール・オルフ」「航海の安全」「船舶の旗信号」「スクラップ」でした。

ただし 171 作品（含む文献）のうち、大金賞 35、金賞 49 で、上位 2 賞で全体の半分なので、国際展にしては少し甘いという印象がぬぐえません。



展示会会場

欧州郵趣事情ですが、最近の傾向として全般に「内向き」な印象です。この数年は、欧州で世界展、それも全部門をカバーする大イベントはほとんど開かれていません。プラグ 2018、イスラエル 2018 がありますが、いずれも特定部門限定の競争展でテーマ部門は除外されています。郵政の民営化で、経営が厳しいからと良く耳にします。しかしながら欧州域内では、小型の地域

展が頻繁かつ活発に開かれています。今回の「マルティラテラーレ 2017」も 7 か国共催ですが、これ以外にも、「ノルディア展」(北欧諸国)、「ドイツーデンマーク共催展」、「アルペ・アドリア展」(オーストリア、クロアチア、イタリア、ハンガリー、スロベニアの 5ヶ国共催) などがあります。またルクセンブルクのモンドルフで開かれる EXPHIMO などはテーマティック専門で、毎年、違うテーマを扱っています。今年、ワンフレーム展ですが、来年は「鳥」がテーマ、再来年は「音楽」で、それ故に 2018 年の MUSIKUS 総会は、モンドルフに決定済みです。このように英・独・仏などの大国による世界展が無くなり、小規模な域内展が中心になるとアジアから参加機会が無くなるのが残念です。また今年開催のドイツ・エッセンの切手展では、テーマティックのヨーロッパ・チャンピオンに、旧知のイスラエルのマジエール氏「土地耕作—農業の始まりから現代まで」が選ばれました。これは、テーマ特化のコンペで、チャンピオン・クラスと 8 部門 (芸術と文化、歴史と組織、人間の日常生活、スポーツとレジャー、輸送と技術、医薬と科学、動植物、農業とペット) で争う競争展です。このようにヨーロッパ大国による世界展が無くなり、欧州域内に限定した域内展またはテーマ専門展が中心となるとアジアから参加機会が無くなるのが残念です。

アジア域内にもそのような動きが無くはありません。例えば、今年、四カ国共催展 (シンガポール、タイ、マレーシア、インドネシア) とかタイ・タイペイ共催展などの動きです。しかし、極東の近隣諸国の協力で、地域展が開かれたことは寡聞にして知りません。趣味を通じて、個人個人が交際し異文化を理解することは国際関係を改善する上でも大切なのでぜひこうした動きが出ることを期待します。



賑わうデラー・ブース

(大沼記)